山と博物館

第36巻 第8号 1991年8月25日　　大町山岳博物館

遠見尾根より唐松岳を望む　写真と文　和田　武次

私がカメラに興味を持ったのはずっと以前ですが、風景写真に力をいれるようになったのはごく最近のこと、ある写真展で素晴らしい写真を見てからです。自分でもいつか、あのような感動を与えるすばらしい写真を撮ってみたいと思っています。

また、今まで気づかなかった自然の魅力、この地の四季折々の風光、朝夕の淡いグラデーションの美しさを、ファインダーを覗くようになって特に感じています。

北アルプスの山麓に生活をしているという地の利を活かし、また、良き先輩、良き仲間と共に、これからも感動を写真に残したいものです。

写真は遠見尾根より望む唐松岳（二、六九六m）です。北アルプスの中では、大町市から日帰りできる私の好きな山の一つです。

夏場は八方尾根から四、五時間で往復できます。

今は八方尾根の黒菱平までゴンドラとリフトを乗り継いで行けるためか、中高年の登山者が目立ちます。

一方、遠見尾根もテレキャビンとリフトで一瞬のうちに登ってしまいます。

五竜岳への登山路であるこの尾根は、白馬三山、大黒岳、五竜岳等々が眼前に追る三六〇度の展望台でもあります。

今年は梅雨が長かったのか、行く度に雨に降られました。曇天は高山植物や昆虫を写すのには好条件と聞いていたので、花や昆虫を写しながら山の雲の動くのを長い時間待ちましたが、望む光景にはなりませんでした。

澄みきった夏の青空が待ちどおしいです。

ところで、山へ行く度に気づくのは、空き缶やゴミの散乱です。

山を見つめる一人として、人為的な環境の破壊は進めたくない。

いつまでも綺麗な山であって欲しいと願うものです。

（北安曇郡松川村在住）

大町の河川①
高瀬川あれこれ

榊原邦夫

高瀬川水系

高瀬川

高瀬川は大町を流れる一番長い河川で、一級河川信濃川水系の二次支川で、源は湯俣川と水俣川である。

湯俣川は上流部でワリモ沢赤沢と出合い、また硫黄尾根赤岳と樅沢岳の中程から流れ出る硫黄沢の水が流れ込んでいる。源流部は三俣蓮華岳と双六岳の麓、樅沢から流れている。

水俣川は槍ケ岳に続く北鎌尾根をはさむかたちで西の西鎌尾根を源流とする千丈沢と、東の東鎌尾根から天上沢が、千天の出合いで合流し水俣川となり、晴嵐荘の近くで湯俣川と一緒になり高瀬川となる。天上沢は北鎌尾根から槍ケ岳に登る上級者コースとして登山者に広く知られている。

硫黄尾根

噴湯丘

七倉ダムから歩いて高瀬ダムを見ながら一泊コースでゆっくり高瀬渓谷を散策できる距離に噴湯丘がある。

高瀬ダムのバックウォーターから歩いて約一時間半で湯俣川、水俣川の出合いにある山小屋晴嵐荘（せいらん）に着く。さらに晴嵐荘から十分の所、湯俣川左岸に国の天然記念物に指定されている球状石灰石と噴湯丘がある。

噴湯丘とは温泉と一緒に噴出した石灰石が固まったもので、今は高さ二メートルから二メートル五十センチのものが二つある。昔は数も多かったようだが出水によって流されてしまった。今も湧出箇所が川床に近いため、出水の時には流出の危険に晒されている。今後、噴湯丘を保存するための対策が望まれる。

これからの大町の発展のためにも高瀬の素晴らしい景観と温泉、珍しい噴湯丘がだいじな観光資源にもなるのではないか。

高瀬ダム湖

標高二千三百メートルに住む原種の岩魚

湯俣川に沿って三俣蓮華岳に登る登山道伊藤新道は、今は吊り橋が全て壊れて使用不可能であるが、渇水期には出合いから遡上すること約四時間で硫黄沢の出合いに着く。

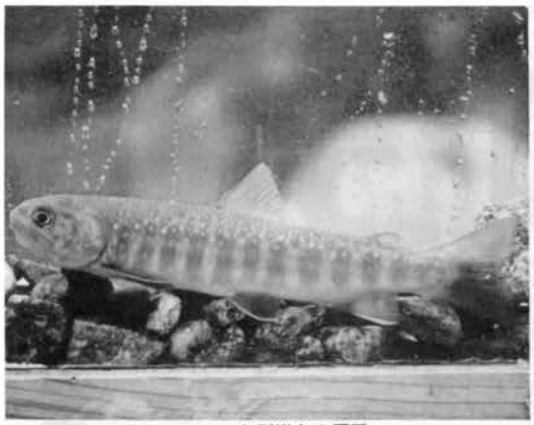
さらに硫黄沢との出合いから急勾配になる湯俣川を登ること約二時間で樅沢に着く。樅沢は上流部では標高二千三百メートルに達し、そこには大町で一番高い所に住むニッコウ型岩魚の原種が生息している。

湯俣川にかかる伊藤新道の吊り橋

噴湯丘

硫黄沢より上流に生息している岩魚は籠川の岩魚に比べると成長が一年程おそいが、原因は餌となる水生昆虫が少ないからと思われる。これからの調査が必要だ。

湯俣は硫黄沢の出合いより上流には岩魚がいるが、湯俣、水俣の出合いより硫黄沢までの本川には岩魚の生息は不可能であると思われる。原因はペーハー二・〇～二・五という硫黄沢の強酸性の水の影響のようだ。



樅沢のニッコウ型岩魚の原種

湯俣川源流

高瀬川の魚

高瀬ダムが完成したのは昭和五十三年、湛水が始まったのは十二月からである。

その後北安中部漁協がヤマメ、アマゴ、イワナ、カワマス、ニジマス、ヒメマス、ワカサギ、ウグイ、コイ等を放流したが、いまはウグイ、イワナ、コイ、ニジマス等がよく釣れる。

東沢は取水堰、五郎沢は砂防堰堤まで岩魚が遡上するが、不動沢、ニゴリ沢は川床がダム湖の水面より上がり、また沢は砂と小石ばかりとなり岩魚の遡上には不適な沢となってしまった。

高瀬ダム上流左岸五郎沢より上の本流には魚影は少ないが、川九里沢等の支流には岩魚が遡上している。

また、水俣川の千丈沢天上沢には岩魚はいるが数が少ないと言われているが、いまだ調査不足である。

不動沢（ダム湖出合付近）

高瀬川の水

前にも述べたが、湯俣川上流の硫黄沢から流れ出る強酸性の水と、晴嵐荘より上流の湯俣川噴湯丘辺りから流入する温泉水の汚染と、高瀬川汚染帯と言われる花コウ岩から流出する水には多量のフッ素が含まれている。

この影響について、昭和二十五年十月二十三日、常盤小学校（現大町南小）が全校児童七百五十四人を調べたところ、四十・七％にあたる三百七人の児童に斑状歯が発生していた（南小百年誌）。

また、県衛生部と大町保健所が調べた結果、一本木放水路の水を飲用していた住民の五十二・二％、和田川沓掛用水路の水を飲用していた人の三十七・二六％が斑状歯になっていた事がわかった。

その原因として、国立公衆衛生院洞沢勇氏が県衛生部に報告したところでは、上流湯俣川で〇・四七ＰＰＭ、籠川合流点付近〇・四五～〇・三ＰＰＭ、一本木放水路〇・八ＰＰＭ、沓掛用水中部放水路〇・四八～〇・四七ＰＰＭ、そして葛温泉六・〇ＰＰＭと多量のフッ素が含まれている事によるものであると報告している。

高瀬渓谷の最下流にある建設省大町ダムは、将来の水道水の確保も見込んで作られた多目的ダムであり高瀬広域水道企業団も発足している。

大町市上水道事業六十五年誌によると、昭和二十六年五月から大町周辺水道調査委員会が厚生省の援護をうけてフッ素除去調査を四年にわたっておこなった。この結果、フッ素の含有量の許容限度を〇・三ＰＰＭにすること、除去に要する費用は、浄水単価とほぼ同額の費用が必要としている。

一方、フッ素の除去施設の扱い方も問題で、このためダム下流において貯水後のフッ素含有量の追跡調査を継続中であるが、これによるとここ数年来、厚生省が示す基準値〇・八ＰＰＭは下回っているが、除去施設の設置は、かなり至難なこととみられる、としている。

山紫水明の町大町市は、山岳都市水の町として広く知られているが、全ての水が飲用に適しているわけではない。

（大町市在住）

大町ダム

斑状歯　大町市立南小学校百年誌（旧常盤小学校）
（昭和二十五年十月二十三日調べ）

	清水	西山	須沼	下一	上一	泉	計
調査人員	172人	118人	99人	102人	147人	116人	754人
1学年	0人	4人	4人	7人	2人	6人	23人
2学年	8人	9人	5人	9人	8人	6人	45人
3学年	17人	10人	10人	9人	13人	14人	73人
4学年	8人	12人	11人	9人	15人	9人	64人
5学年	9人	9人	4人	7人	6人	10人	45人
6学年	9人	8人	12人	9人	12人	7人	57人
計	51人	52人	46人	50人	56人	52人	307人
%	29%	44%	46%	48%	38%	44%	40.7%

当時水道水が無くて川の水で生活をしていたところ斑状歯が児童に発生し、これが原因にもなり水道問題が本格的になってきた。資料には上記のように記されている。

海を渡ったカモシカの毛皮

千葉彬司

ニホンカモシカは日本の本州、四国・九州にしか生息していないことは既によく知られているところである。

カモシカが海外へ渡ったのは最近の事のように思われているが、実は明治時代に海外へ出ていたのである。そのことはあまり知られていない。日本動物園水族館協会の小森厚事務局長の調査によると、明治十二年に横浜のアダムソン・ベル保険会社のヘンリー・J・S・ブライヤー氏が一頭のオスのカモシカを、ロンドン動物園に寄贈しているのである。

これはカモシカが生きたまま海外に渡った第一号である。今ではカモシカの輸送にはたいてい航空機が利用されているが、当時は海上を船で輸送した訳であろうから、海上の長旅の間の飼育管理はかなり大変であっただろうと思う。

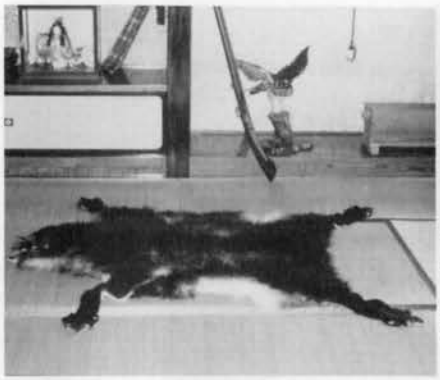
カモシカの海外渡航の記録はそれから昭和四十八年までプッツリととだえる。そして海外渡航の第二号は昭和四十八年の中国北京動物園に贈られたオス・メスのひとつがいである。これは日中国交回復を記念して中国からジャイアントパンダが日本に贈られ、その返礼として日本から贈られたものである。

海外渡航第二号のカモシカが、大町山岳博物館で育てられたものであることは意外と知られていない。

その後、五十二年にやはり中国の西安市に、五十三年に同じく北京動物園に、五十七年に瀋陽動物園にそれぞれひとつがいが贈られている。中国以外には五十一年にアメリカのロスアンジェルスに、また、五十二年と五十五年に同国のサンディエゴ動物園に贈られている。

一方、ヨーロッパ方面ではオーストリアのシェンブルン動物園に五十九年と六十年に贈られている。これは海外渡航第一号としてロンドン動物園にカモシカが贈られてから再びヨーロッパに渡るまで百余年が経過している。続いて六十一年にはドイツのベルリン動物園に贈られている。いずれにしても海外に渡ったカモシカの数はそう多いものではない。

カモシカの生息地である日本では古い時代から狩猟の対象とされ、毛皮は保温性などが優れているところから敷物や鞍敷、また、その毛を混ぜて毛せんを織ったり、冬場の狩猟の際の防寒用の手袋、足袋、みの、背負い袋、小物入れなどさまざまな形で活用されてきている。



カモシカの毛皮

このように毛皮として優れているものが海外には出ていなかったのだろうか。日本は今でこそ毛皮製品の輸入国として品数も豊富で、ミンクや銀ギツネ、クロテン等の高級毛皮製品がデパートの店頭を飾り、ご婦人方の羨望のまなざしを受けている。

しかし、毛皮輸入国日本も、かつてはかなりの量の毛皮の輸出をしていたことを残された記録が物語っている。

大正十二年に発行された『毛皮年報』には、明治二十年代の毛皮貿易の先駆者であった横浜の阿部商店が、明治二十年から二十五年までの六年間に外国商館に売り渡した毛皮の約定書が発見されたとして、その写が掲載されている。そのなかの一枚に『鴨鹿毛皮』の記載がある。

また、これら十三枚の約定書に載っている動物の種類は九種類、数量は三六三七七枚にのぼる。この取り交した約定書によると、売り渡した毛皮のうち最も枚数の多い種類はタヌキの三三七九二枚（内北海道産一二五〇〇枚）、次いでテン、イタチの一〇一六枚、カワウソ二〇〇枚、テンの尻尾二〇〇本、キツネ一一六枚、アナグマ、リスがそれぞれ一六枚、カモシカ五枚の順である。今では絶滅状態にあるカワウソの毛皮がこの当時二〇〇枚も輸出されていたのである。

そして僅か五枚ではあるがカモシカの毛皮が明治時代に海外へ渡っていたのである。この毛皮が外国でどのように使われたのか興味のあるところであるが知るよしもない。この約定書は毛皮としてカモシカが海外へ出た、最も古い記録ではないかと思われる。

ただこれらの記録も阿部商店に残されていた外国商館との約定書が十三通のみであり、上記の数量が日本から外国に売り渡された全てでないことは言うまでもない。

ちなみに、価格の方を見ると、一番値段の高いのはカワウソで一枚四円七十銭、カモシカ、キツネは一円である。

終りに貴重な記録が掲載されている『毛皮年報』のご提供をいただいた、日本山岳会の松田雄一氏にお礼申し上げる。

（大町山岳博物館　館長）

記

一、鴨鹿毛皮	五枚	五圓
一、狸同一番	十枚	七圓八十仙
一、同二番	十枚	六圓八十仙
一、同格下	十枚	二圓八十仙
一、貂毛皮	十枚	四圓四十仙
一、狐毛皮	十枚	十圓
一、貉皮	十枚	三圓五十仙
一、鼬皮	十枚	一圓二十仙
一、木鼠	十枚	八十仙

〆八十五枚　代金四十二圓三十仙

右現品相納入申候也

二月十三日

大正12年発行『毛皮年報』より

山と博物館第36巻第8号
一九九一年八月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一、二三〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一二二九二）